

ホルグレーブの「転向」考

Is It Holgrave's Conversion?

小林 俊 哉

Toshiya Kobayashi

に指摘する。

I

The House of the Seven Gables の第二章, The Little Shop-Window において, Hawthorne は “Life is made up of marble and mud” * と述べているが, これは彼の二元的人間観, 世界観を強く示すものと言ってよいであろう。Levy は次のように述べている。

One thing Hawthorne did preserve from his puritan ancestors was a sense of the duality of man's nature....¹

Levy の言うところの “duality of man's nature” は本作品の Holgrave の性格描写にも強力にあらわれている。Hawthorne は Holgrave に内在する対立する性格要因を首尾よく均衡させ, 内部矛盾のない人物の創作に成功している。本作品にあっては Holgrave の dualistic な描写のため, 彼の登場後しばらくは彼がいわゆる善玉なのかあるいは悪役なのか定かではない。このきわめて限られた意味においての Holgrave の気質は, 例えば同じ作品の Phoebe, そして Jaffray のそれとは明らかに異なっている。少なくとも表面的には Phoebe は徹底して善人であり, また Jaffray は完全なる悪人である。しかし一見すると非常に曖昧な, さらに悪く言うとなつかまえどころのない Holgrave も, 彼の内部の拮抗しあう力の間の “balance or epuipoise”² を彼が一たびその手中に入れると事情は一転する。すなわち作品の終末に見られるように彼はまったく新しい人物に生まれ変わるのである。彼のこの balancing は, 最終的に彼と Phoebe の結婚という形で頂点に達する。これはまた, 長い間敵対関係にあった Maule と Pyncheon 両家の和解をもたらすという意味でも, 作品のむすびを飾るにふさわしい象徴的な出来事である。Fogle は Hawthorne においては “balanced union” の存在に注目すべきであると次のよう

The ultimate union of Holgrave and Phoebe is symbolically the ideal union of heart, centripetal and centrifugal forces in perfect balance. Typically with Hawthorne, however, the union is a balance rather than a synthesis.³

Holgrave にある balanced union は特に次の二点において顕著にみられる。すなわち第一は彼の observer としての役割の中において, さらに第二には彼と日光そして月光との関係においてである。Levy は前出の論文において次のように述べている。

Many critics have remarked that Holgrave acts inconsistently, that his repudiation of his early position is unmotivated and, in fact, sentimental.⁴

多くの批評家達にこのように性格づけられ, そして位置づけされる Holgrave であるが, 必ずしもこのような彼に対する理解は的を得たものとは言えぬのではない。つまり一見彼の “inconsistency” とみえるものは次の事実から来るものに他ならない。つまり彼は誠実に observer であり続けようとする一方, 徹頭徹尾そうはなり切れぬという一面を持ち合わせているのである。酒本はこの点に関して

自分の現在に安住しきれず, つねに批判者を自分のなかにかかえこんでいるこの不安定なありようが, ホーソーンに精神にいちばん基本的な状況だと思われる。.... 対象を凝視しながら, 凝視する自分には不信の目を向けつけねばならぬとは, 実にやりきれぬ無間地獄だ。⁵

と指摘する。正に Holgrave はこの極めて不安定な状況

* Nathaniel Hawthorne, *The House of the Seven Gables*, ed. Seymour L. Gross (New York: W. W. Norton, 1967), p. 41.

の中に置かれているのである。しかし同時にこの不安定で、observer になり切れぬという一面が、彼を「悪鬼になる可能性」⁶ から救い出しているという点も忘れてはならないであろう。

更に彼の描写をみてゆくと、彼の日光と月光に対する態度に些細ではあるがはっきりとした変化がうかがわれる。作品の始まりから中頃まで、彼は主に日光との関連にあって描かれるが、結末に近づくにつれ日光と月光両方との関係が強調される。Holgrave 自身作品初期では日光にのみ関心を持ち、これへの言及も多い。これは主に彼のその時点での daguerreotypist、銀版写真師としての役割に負う所が大きい。しかし Phoebe の登場以後、彼は日光ばかりではなく月光の持つ美しさにも開眼させられ、日光、月光各々の重要性に新たに思いを至らす事になるのである。

II

Von Abeleは次のように指摘する。

Like Hawthorne himself, and others of his surrogates, Holgrave figures largely as a “spectator” of the “drama” being “enacted” around him....⁷

展開する “drama” の “spectator” としての役割を十分に果たすために、Holgrave は他の登場人物とある程度の距離を保たねばならない。ことに、出来る限り客観的に “drama” を観るためにはこの条件は必須である。実際に早くも第二章において、彼は多かれ少なかれ他の人物にくらべ「外界」との接触が限定されている。Hepzibah の古い屋敷のただ一人の下宿人である Holgrave は、彼に関する記述の初めて登場する第二章において次のように描かれている。

[He is a] respectable and orderly young man, an artist in the daguerreotype line, who, for about three months back, had been a lodger in a remote gable—quite a house by itself, indeed — with locks, bolts, and oaken bars, on all the intervening doors. (p. 30)

ここでは、かなり孤立し、独立した「破風」に住む Holgrave という事で、なるほど彼の外界との断絶があらわれてはいる。が、同時に Holgrave の住む破風は、Hepzibah の居住する屋敷の一部にすぎぬという面も忘れられてはなるまい。つまり、彼が observer、或いは

spectator としての役目を演ずるためには、まず彼が最初にこの屋敷という、言わば一つの独立した世界に入りこまねばならなかったのである、この意味においては、彼が完全にすべてから離れ独立していると言うのは正しくない。換言するならば、彼の独立性というのは彼が、“drama” の進行を完璧に支障なく見届けられるという条件内にあってのみ与えられるものである。従って、屋敷内という一つの世界の中に完全にとりこまれつつもある意味での独立性が保たれている空間であるところの彼の破風という環境は、彼には格好のものであると言える。彼の置かれている場は、つまり独立性を持ちながらも同時に外界との接触も十分に可能なものである。この点で、この二つの相反する特徴を持つところの彼の置かれた状況は Holgrave 内部にも拮抗し合う要素が存在するという点との関連にあって大変に象徴的であると言える。

Holgrave は、新しく開店した Hepzibah の cent-shop の一番目の客として第三章において初登場する。Hepzibah はかつて非常に栄えたが今や落ちぶれてしまった Pyncheon 家の末裔として自身の生活を支えるためやむを得ずこの店を開くことになったのである。しかし今だに自分を “lady” (p. 44) として強く意識している彼女には、このような境遇に追いこまれてしまった事が耐えられぬのであり、また屈辱的な事なのである。このような場面に初登場する Holgrave に関して Fogle は次のように指摘する。

Holgrave as he is first presented to us is a man of the head or intellect, with the intellectual's shortcomings.

作品の初期にあって Holgrave のここに指摘されるような一面は確かに存在する。しかしながら、第三章の、彼が初めて作品に現われるこの段階にあってすら、彼をただ単に “man of the head or intellect” と割り切ってしまう事には無理がある。彼に関する描写は、彼の冷たさのみに言及しているわけではないからである。むしろ、一番目の客として Hepzibah の cent-shop に姿を見せ、彼女に影響を与える Holgrave の記述からは、むしろ Fogle のさし示すものとは反対の姿が浮び上ってくる。

People, like Hepzibah, who are in difficulty and distress, or in any manner at odds with the world, can endure a vast amount of harsh treatment, and perhaps be only the stronger for it; whereas, they give way at once before the simplest expression of

what they perceive to be genuine sympathy. So it proved with poor Hepzibah; for when she saw the young man's smile—looking so much the brighter on a thoughtful face—and heard his kindly tone, she broke first into an hysteric giggle, and then began to sob. (pp. 43—44)

ここにおける Holgrave は、少なくとも Hepzibah から見ると、この試練の時にあって彼女が一番必要としている “genuine sympathy” を持っているのである。勿論、Holgrave の示す “sympathy” の果たしてどれほどが、彼本来の性質から来るものであるかは明らかではない。Holgrave が店に足を入れた時に背後から差し込んでくる日光の影響を無視することが出来ないからである。

Coming freshly, as he did, out of the morning light, he appeared to have brought some of its cheery influences into the shop along with him. (p. 43)

これらから考えると、少なくとも次の事は言えるように思われる。すなわち Hepzibah が Holgrave と会う事によってなぐさめられた時点で、彼はまったくの善なるものではないにせよ、完全なる冷血漢でも無論ない。見方によって両義にとれる人物なのである。ところが、Holgrave と Hepzibah の間の会話が始めると彼の “man of the head or intellect” としての一面が前面に出てくる事になる。二人の会話が進む中で、彼の過去に対する恨みが爆発するのである。

“...I am a woman!” said Hepzibah piteously. “I was going to say, a lady,—but I consider that as past.”

“Well; no matter if it be past!” answered the artist.... (p. 44)

Holgrave のこのような思考に対し、Hepzibah は言う。

“These are new notions... I shall never understand them; neither do I wish it.” (p. 45)

ここにおいては、この直前に Hepzibah は Holgrave の暖かい言葉に大いに慰められたにもかかわらず、彼女にとって Holgrave は本質的には “new man,” the democrat at his best”⁹ と捉えられている。Holgrave のつかまえてころのなさが、Hepzibah の彼に対する反応をも揺り動かす結果になっている。従って、Holgrave の内部に

は冷たさと暖かさが、少なくともこの時点では、奇妙にも同居しているのである。つまり、head と heart、彼の知性と感性の間にはある種の balanced union があるわけである。彼の気質は第三章のこの時点では知性の方向に傾いているが、作品が進むにつれ次第に彼の感性あるいは感情の方向へと徐々に動いてゆく。

Holgrave と Phoebe との関係にあっても、彼の急進的な思考と彼の冷淡さがまず強調される。彼らの初めての出会においても、Phoebe の彼に対する第一印象はこのようなものであった。初めて自らを彼に紹介する時(第六章)、Phoebe は “manner of some reserve” (p. 90) を保たざるを待ななかった。なぜならば、

...she [was] aware that her new acquaintance could be no other than the Daguerreotypist, of whose lawless propensities the old maid had given her a disagreeable idea. (p. 90)

しかし時間の経過に伴って二人の関係も次第にうちとけたものに変化してゆく。

...by the pressure of the seclusion about them, they had been brought into habits of some familiarity. (p. 175)

にもかかわらず、依然 Holgrave が “...too calm and cool an observer” (p. 177) であるという Phoebe の印象はなかなか消えない。ある時、この点に関して彼女は Holgrave をかなり強くなじる。

“You talk as if this old house were a theater; and you seem to look at Hepzibah's and Clifford's misfortunes, and those of generations before them, as a tragedy, such as I have seen acted in the hall of a country-hotel; only the present one appears to be played exclusively for your amusement! I do not like this. The play costs the performers too much and the audience is too cold-hearted.” (p. 217)

この厳しい批判を Holgrave 自身もある程度認めざるを待たない。

“You are severe!” said Holgrave, compelled to recognize a degree of truth in this piquant sketch of his own mood. (p. 217)

しかし、Phoebeのこの非難を全面的に肯定するのは無理があるように思われる。Holgrave が observer であるという事実もまた balanced union の概念の中で捉えらるべきである。Holgrave が自分自身 observer になっているのは確かである。彼は "...Hawthorne's ideal artist who can work the highest miracle of which art is capable" 10 であり、この事実は彼の observer たる事に大きく寄与している。なぜならば、真の artist たる者は彼の創作活動を始める大前提として、森羅万象を正しく観察 (observe) する能力が必要だからである。Holgrave 自身、自らの言葉で observer たらん希望を述べている。すなわち、Phoebe の Clifford の心の中をのぞき込む ("peep in" (p. 178)) 事に対するためらいに関し、Holgrave は "I can understand the feeling, without possessing it" (p. 178) と条件をつけながらも次のように明確に言い切る。

"Had I your opportunities, no scruples would prevent me from fathoming Clifford to the full depth of my plummet-line!" (p. 178)

彼はこうも述べる。

"It is not my impulse—as regards these two individuals—either to help or hinder; but to look on, to analyze, to explain matters to myself, and to comprehend the drama which, for almost two hundred years, has been dragging its slow length over the ground...." (p. 216)

それでは Holgrave が observer という役割を徹底的に演じ切っているのかというと、必ずしもそうではない。彼の observer 志向の希望とは裏腹に彼は次のようにも述べる。

"...this is such an odd and incomprehensible world! The more I look at it, the more it puzzles me; and I begin to suspect that a man's bewilderment is the measure of his wisdom.... A mere observer, like myself, (who never have any intuitions, and am, at best, only subtle and acute,) is pretty certain to go astray." (p. 178—79)

彼の観察の対象物の不可解性、さらには彼自身の能力の限界を彼は知り尽くしている。またこの事が彼を、行き

過ぎた冷血の observer に転落する事から救っているわけである。故に、彼の内部には observer たらんとする欲求とそれを理性的に抑制しようとする力の二つの対立する要素が働いている。この意味でも彼は "man of balanced union" と呼び得るのである。

III

Holgrave が銀版写真師であるという事も、この作品で日光の持つ重要性を考えた場合大きな意味をおびてくる。Marks は日光と銀版写真との関係についてこのように述べる。

...the appellation 'sun picture' was attached to the earliest productions of Daguerre. 11

Hawthorne にとっても、Fogle の指摘する如く太陽は極めて重大な意義を持つ。

Despite the "power of blackness" that Melville admired in Hawthorne, his world has its solar system. The sun is its center, the divine light and the source of light. 12

本作品中でも、Holgrave が日光に対して言及する箇所はしばしば見られる。前にも述べた通り、新しく店を開いたばかりの重苦しい気分を満たした Hepzibah を元気づけた Holgrave に、太陽の力も働いた事は確かであろう。さらに、店を立ち去る直前に彼は自らと太陽の関係を次のように言う。

"... [In] my rooms, ... I misuse Heaven's blessed sunshine by tracing out human features, through its agency." (p. 46)

Pyncheon 屋敷の庭園での Phoebe との初対面においても彼は述べる。

"In short, I make pictures out of sunshine" (p. 91)

彼が銀版写真師であるという事実は、彼の observer としての役割を十分に果たす事を助けている。彼はこのように信じている。

"there is a wonderful insight in heaven's broad and simple sunshine. While we give it credit only

for depicting the merest surface, it actually brings out the secret character with a truth that no painter would ever venture upon, even could he detect it.” (p. 91)

しかしながら、Fogle は太陽は必ずしも真実をすべての面において照射するとは限らないと以下のように論ずる。

...this medium [sunlight] can hardly be adequate, particularly for a writer so interested in depth and chiaroscuro as Hawthorne. His daguerreotypes, like Holgrave's own vision, for which they are a symbol, are clear but limited. One doubts that Holgrave could produce a just likeness of Hepzibah.¹³

もし Fogle の述べる通りに太陽の光のみが真実のあらゆる側面をあらわせないとなると、当然日の光は他の光によって補なわれねばならない。そして本作品ではその光は月の光を指すのである。Fogle はこのように述べる。

Chapter XIV, “Phoebe’s Good Bye,” casts another sort of light upon the subject, the moonlight of imagination and sympathy, perhaps appropriate to Holgrave’s artistry in romance, and appropriate also to the growing attachment between himself and Phoebe, now definitely signalized.¹⁴

ここにおいては、日光の力の不充足さを補うという役目を負わされている月光の登場をみる事ができる。つまり日光と月光の balanced union が存在しているのである。

22才にまだ満たない Holgrave はすでにかかりの職歴を持つ若者である。

...he had already been, first, a country-schoolmaster; next, a salesman in a country-store; and, either at the same time or afterwards, the political-editor of a country-newspaper. He had subsequently travelled New England and the middle states as a peddler...he had studied and practiced dentistry... he had visited Europe, and found means, before his return, to see Italy, and part of France and Germany... he had spent some months in a community of Fourierists... he had been a public lecturer on Mesmerism.... (p. 176)

このように多様な仕事を持ち、様々な経験をすでにしている Holgrave であるが、彼の現在の銀版写真師という職もどうやら彼のライフワークとなり得るものではないのである。

His present phase, as a Daguerreotypist, was of no more importance in his own view, nor likely to be more permanent, than any of the preceding ones. (p. 177)

彼がいまだに自分の天職とでも言うべきものを見つけあぐねているという事実は何を意味するのであろうか。少なくとも、彼の内面的な資質がまだまだ固まっておらず、たえまざる形成段階にあるのだという事はできるだろう。つまり彼の性格はこれからいかにようにも変わりうる可能性を備えているわけである。この意味で、銀版写真師の仕事も、彼が自分の一生をかけるに値すると悟り切っているとはとても思えない。彼は種々の “premature experience of life” (p. 179) を経てきてはいるものの、いわゆる若さを失っているわけではない。

Man’s own youth is the world’s youth; at least, he feels as if it were, and imagines that the earth’s granite substance is something not yet hardened, and which he can mould into whatever shape he likes. (p. 179)

しかしながら、ここでは “...he had never lost his identity” (p. 177) という事も忘れられてはならないのである。さらにこの点に関して彼に対する記述が続く。

...he had never violated the innermost man, but had carried his conscience along with him. It was impossible to know Holgrave, without recognizing this to be the fact. (p. 177)

この点における Holgrave の律義さ、実直さがあったればこそ、彼が Phoebe の信頼を最終的に勝ちうる事ができるのである。

Phoebe soon saw it... and gave him the sort of confidence which such a certainty inspires. (p. 177)

Holgrave と Phoebe との間柄はここに、前にも増して親密になる。ところで前述の通り、Holgrave は自分の将来に関する限りまったく目処がたっていない。また Von

Abele は Phoebe については次のように指摘する。

[Phoebe] is continually linked with that life-giving thing, the sun....¹⁵

それぞれ上のような性格を持つ二人が、次第に互いに対する親近感を増すという事は非常に大きな意味をもってくる。つまり Pyncheon 家敷の庭園でのロマンティックな情景において Phoebe と共に時を過ごす際、Holgrave はもう一つの光、つまり月光の持つ今まで気づく事のなかった美を発見するのである。

しかし、二人が真に結合される前に、Holgrave はもう一度その意志の力を試されねばならない。彼はこの庭園において、Phoebe に Alice Pyncheon の物語を語り聞かせる。が、Phoebe は、その物語のあまりの迫力と Holgrave の絶妙なる語り口により、彼によってほとんど呪文で縛りつけられたような状態におちいる。それにもかかわらず、Alice をその魔術のもとに完全に落とし入れた Matthew Maule とは異なり、Holgrave はその力を持ちながらも Phoebe をその妖術に縛りつけ彼女を完全に制御しようとはしない。彼は自分の identity を失なった事は一度もなかった (p. 177) と同時に彼は Phoebe の identity も自分のそれと同様、かけがえのないものとして尊重したのである。故に Hawthorne はこう述べる。

Let us, therefore...concede to the Daguerreotypist the rare and high quality of reverence for another's individuality. (p. 212)

仮に Holgrave が Phoebe を完全に催眠術にかけていたとすれば、彼女の状態は Alice 同様、悲劇的なものになっていたに相違ない。

...she [Alice] was Maule's slave, in a bondage more humiliating, a thousand-fold, than that which binds its chain around the body. (p. 208)

ここでは Hawthorne にとって、個人の魂の尊厳というのが、肉体のそれより幾倍も重要であり、従ってそれを傷つける事がいかに罪深いものであるかが強くうかがわれる。いずれにせよ、本作品の終結部において Holgrave の正体があきらかにされるわけである。

The daguerreotypist is shown in his true identity as a descendent of Matthew Maule.¹⁶

この意味において、Holgrave が Phoebe をその繰り人形とする事を敢然と拒否したというのは非常に意義深い事である。Levy は次のように述べる。

His refusal to hypnotize Phoebe repudiates the past and prepares for the eradication of the curse.... From here to the close, there is a definite lightening of tone, imagery, and theme, with the single parenthesis on the death of Judge Pyncheon.... An instance of this lighter tone and imagery occurs after Holgrave refuses to hypnotize Phoebe; the tone reveals that the young man has won through to a more profound understanding of and harmony with the world about him.¹⁷

従って、彼がこの最後の「試験」に合格した事により、彼は Maule 家の呪いを消し去ったばかりでなく、Phoebe との距離を一層近くしたのである。さらにこの時点以後作品中にみられる、物語の調子の明化にも Holgrave がまた一つの変化を経験した事をみてとれる。

この Alice の物語の終了後、Holgrave と Phoebe は第十四章という Pyncheon 家の庭園における中心場面に入ってゆくのである。ここまで、ほぼ全般にわたって作品を支配してきた太陽のイメージは、除々に月のそれにとってかわられる。

By this time, the sun had gone down....The moon...now began to shine out, broad and oval, in its middle pathway. These silvery beams were already powerful enough to change the character of the lingering daylight. (pp. 212—13)

これに伴ない、今まで繰り返し自らを太陽と結びつけてきた Holgrave にも、変化が見られるようになる。“...sweetly cool atmosphere, after all the feverish day” (p. 213) と、月光とに触発され、彼はこのように言う。

“It seems to me... that I never watched the coming of so beautiful an eve, and never felt anything so very much like happiness as at this moment.” (pp. 213—14)

彼はさらに続ける。

“Moonlight, and the sentiment in man's heart, responsive to it is the greatest of renovators and

reformers. And all other reform and renovation, I suppose, will prove to be no better than moon-shine!" (p.214)

"I never cared much about moonlight before." (p.214) と述べる Phoebe ですら "What is there, I wonder, so beautiful in it, tonight?" (p.214) と言わざるを得ない。しかし、これにもかかわらず、日の光の持つ力、あるいは洞察力を完全に否定し去るのが Hawthorne の意図であるとは言えないのである。むしろ彼は、日光と月光の balanced union を強調しているのである。"...half-melancholy laugh" (p.214) を浮かべ、Phoebe は言う。

"...life does not look the same, now that I have felt it [moonlight] so." (p.214)

彼女はさらに嘆ずるのである。

"I have given them [Hepzibah and Clifford] my sunshine...but I cannot both give and keep it." (p.214—15)

しかしながら、このように落ちこんでいる Phoebe に対し、Holgrave の答えは明快である。

"You have lost nothing, Phoebe, worth keeping, nor which it was possible to keep." (p.215)

そして彼はすぐに続けて、"Our first youth is of no value." (p.215) と述べる。ここの "Our first youth" というのは、Holgrave と Phoebe 両者ともに太陽と深い関連があった時分と深く関係しているように思われる。Phoebe が、太陽を Hepzibah と Clifford に与えてしまい自分のもとには何も残っていないと嘆くのは、彼女が "first youth" のみをふり返っているためといえよう。けれども Holgrave は次のように Phoebe に説くのである。

"But sometimes—always, I suspect, unless one is exceedingly unfortunate—there comes a sense of second youth, gushing out of the heart's joy at being in love (p.215)

太陽と深い関係を持つ "first youth" がある意味で過ぎ去った今、新しく発見された状態、つまりここで言う "second youth" は必然的に月光と密接な関連性を持つ

わけである。同様に Fogle も "This Eden is...not the first Eden of first youth but a renewal."¹⁸ と指摘する。Holgrave は次のように主張する。

"This bemoaning of one's self (as you [Phoebe] do now) over the first, careless, shallow gaiety of youth departed, and this profound happiness at youth regained...so much deeper and richer than that we lost are essential to the soul's development. In some cases, the two states come almost simultaneously, and mingle the sadness and the rapture in one mysterious emotion." (p.215)

Holgrave はここで、必ずしも "first youth" を完全に排除はせずに、それぞれ日光と月光とに象徴される、"first youth" と "second youth" の balanced union という事を是認している。

結 論

それ故、Holgrave の "inconsistency," あるいは "unmotivated repudiation of his early position" とも見える彼の態度は、balanced union という概念に明確に裏打ちされた、人間の成長の可能性というわく組みの中でのみ論じられるべきものである。この観点で Holgrave をみると、彼の "inconsistency" とも思える彼の姿勢は、実はそうではなく、自身の中に存在する二つの対立する要因との真摯な格闘のあらわれなのである。作品の最後に "conservative" に転向する事で頂点に達すると思われる彼の "repudiation of his early position" は実際のところ、彼はまだ洋々とした未来を眼前にした若者に過ぎぬという事実をさし示しているだけなのである。ここではまだ若い彼が、すでにかなりの職歴を保持している事を思い出す必要があるだろう。彼が Pyncheon 家の庭で、思いもかけず月光の持つ深遠な意味に新たに開眼させられたごとくに、これからの長い人生において彼は自分の主義主張を変えてゆくであろうし、またその権利も持ち合わせている。しかしその「転向」も無論、Holgrave の天性であるところの、人間の魂の尊厳の尊重の問題と抵触しない範囲で行なわれるであろう事は想像にかたくない。Hawthorne はこのように、Holgrave をある意味では非常に若者らしからぬ、厳とした制約はもうけながらも、一つの主義に必要以上に固執しないきわめて幅のある、そしてゆとりのある人間として描いている。この man of balanced union とも言える Holgrave は作品終末で Phoebe と、結婚という形で結ばれる。この事は、

Pyncheon 家と Maule 家の最終的な和解という、作品では最後の balanced union をもたらすという意味において、非常に象徴的な出来事である。この最後の balanced union は、この romance がよって立っている「過去の呪い」(curse of the past) を完全に除去し、この二家族がついに完全なる balance と harmony を持ち存在し続けるという未来を、若い Holgrave と Phoebe に保証するのである。

Footnotes

1. Alfred J. Levy, "The Religion of Love," in *The House of the Seven Gables*, ed. Seymour L. Gross (New York: W.W. Norton, 1967), p. 465.
2. *Ibid.*
3. Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark* (Norman: University of Oklahoma Press, 1965), p. 158.
4. Levy, p. 463.
5. 酒本雅之『ホーソン：陰画世界への旅』p. 178 (冬樹社) 1981年.
6. *Ibid.*, p. 174.
7. Rudolph Von Abele, *The Death of the Artist: A Study of Hawthorne's Disintegration* (Folcroft, Pa.: The Folcroft Press, 1969), p. 62.
8. Fogle, *Hawthorne's Fiction*, p. 156.
9. *Ibid.*
10. Von Abele, p. 64.
11. Alfred H. Marks, "Hawthorne's Daguerreotypist, Scientist, Artist, Reformer," in *The House of the Seven Gables*, p. 333.
12. Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Imagery: The "Proper Light and Shadow" in the Major Romances* (Norman: University of Oklahoma Press, 1969), p. 49.
13. Fogle, *Hawthorne's Fiction*, p. 156.
14. Fogle, *Hawthorne's Imagery*, pp. 78—79.
15. Von Abele, p. 66.
16. William B. Dillingham, "Structure and Theme in *The House of the Seven Gables*," in *The House of the Seven Gables*, p. 457.
17. Levy, p. 464.
18. Fogle, *Hawthorne's Imagery*, p. 80.